

日本の無伴奏サクソフォン作品集をリリース

10年で膨らんだ

日本の現代サクソフォン曲の果実

サクソフォンの現代作品に取り組んで世界的にも注目される大石将紀さんの2枚目のアルバムは、日本の著名な作曲家7人の無伴奏サクソフォン曲を集めたもの。その様々な「音世界」は驚くほど豊穡だ！

サクソフォン奏者

大石将紀

——今回のアルバム『SMOKE』は大石さんの2枚目のアルバムですね。1枚目も無伴奏アルバムでした。

大石 1枚目はオランダの作曲家ヤコブ・ファン・ドールの「スピーチミュージック」という、人の声を使ったサウンドトラックとサクソフォンの曲だけを集めて作りまし

た。ある意味、自分にとっては精いっぱいポップなアルバム(笑)。1枚目からあんなにテーマを絞って出すのは珍しいとも言われましたけど。

——それから言えば、今回は「超本格的」と言えます。

大石 2008年に留学先のフランスから戻って、去年で10年になるんです。その間、現代音楽を演奏する機会がとても多く、まわりから現代音楽の演奏家として見られているという実感もありました。いろいろな作曲家と交流し、いろいろな作品を演奏して来ましたけど、この10年を振り返ると、私が委嘱したものと、私が委嘱したものも含め、サクソフォンの無伴奏作品だけでも錚々たる作曲家の作品が並ぶことに気づいたんですね。それを今まとめて録音することは意味があるだろうと。

——イタリアで録音されたとか。大石 ええ。CDは米国の「ODRDEK」というレーベルからリリースされ、そのスタジオがイタリアにあるんです。正直、ソプラノからバリトンまで4本担いでイタリアに行くより日本で録音したかったんですが、同じ時期にタイミングよくロンドンの

ウィグモア・ホールで行われた藤倉大さんの個展へ出演を依頼されたので、頑張っただけで行きました。けど、もうあんなしんどい思いは二度とたくないです(笑)。

7人7色の無伴奏作品

——それぞれどんな曲なのかを紹介して下さい。

大石 細川俊夫さんの《スベル・ソング》(呪文のうた)《ソプラノサクソフォン》は、2015年の国際オーボエコンクール・軽井沢の課題曲です。

写真提供：東京現音計画、撮影：松藤浩之



題曲として委嘱されたものです。サクソフォンでも演奏可能だと思い、細川さんの承諾を得て僕が編曲し、細川さんが音楽監督を務める武生音楽祭で初演しました。武生音楽祭には5年前から呼んで頂いていて、今年は細川さんのオーボエのための《3つのエッセイ》のサクソフォン版を初演します。《スベル・ソング》はソプラノサクソフォンにもぴったりですし、6〜7分という長さも良く、何度も演奏している曲。サクソフォン版を細川さんにもとても気に入って下さっています。

酒井健治君の《Initial S》(アルトサクソフォン)は白井奈緒美さんの委嘱作品で、これもよく演奏する曲です。バリ音楽院時代に1学年上だった酒井君とはとても親しく、彼の新曲を学校で何曲も初演しました。サクソフォンの曲や、エレキトロンク

スとの曲や、ピエール・ルイヴ・アルトが委嘱して出来たフルートオーケストラとサクソフォンのためのコンチェルトなどもあります。

西村朗さんの《水の影》(アルトサクソフォン)は、須川

1977年 石川県金沢生まれ、千葉県松戸市出身。1999年 東京藝大卒、2001年同大大学院修士課程修了。同年渡仏しパリ国立高等音楽院に入学。在学中にフランス国内の多くのコンクールに入賞。04年アムステルダム音楽院に短期留学。同年パリ国立高等音楽院サクソフォン科、室内楽科を、06年に即興演奏科を全て最優秀の成績で卒業。さらに第3課程室内楽科(サクソフォン四重奏)を07年に修了。在仏中にソロやサクソフォン四重奏「OSMOSE」でクラシックだけでなく現代音楽、若手作曲家の作品発表を精力的に行い、ヨーロッパの音楽祭に出演。アフリカや中国でも演奏活動を行った。即興演奏でもバリの様々なプロジェクトに参加。舞踏家保坂一平と共演したパリでの2回の公演は高く評価され、2008年にはドイツ舞踏会の巨匠ピナ・バウシュのフェスティバル「Tanzfest2008」に招待された。2008年に日本に拠点を戻し、ソロやアンサンブルで精力的に活動している。東京藝大、洗足学園音楽大、東邦音楽大、大阪音楽大で指導にもあたる。サクソフォンをC.ドゥラングル、須川展也、平野公崇、彦坂真一郎、富岡和男、A.ホーンカンプの各氏に師事。

Profile Masanori Oishi



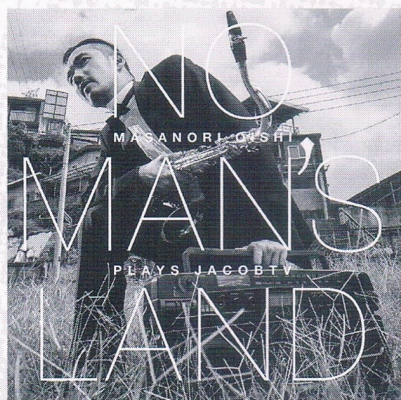
大石さんの最新CD！ 『SMOKE』

～日本の無伴奏サクソフォン作品集～

演奏：大石将紀 (sop、alt、ten、bar)
 曲目：細川俊夫 (スベル・ソング～呪文のうた～) 酒井健治 (Initial S)
 西村朗 (水の影) 藤倉大 (SAKANA) 高橋悠治 (残り火) 杉山洋一 (禁じられた煙 (湾岸通りバラード)) 野平一郎 (一人ぼっち)
 © ODRADEK：ODRCD359・¥3013 (税込)

展也先生がN響と初演したサクソフォン・コンチェルト《魂の内なる存在》のサクソフォン・パートを無伴奏曲にまとめたもの。須川先生のレパートリーで、最近は何回も演奏された曲でもありますが、僕もリサイタルで演奏しましたが、素晴らしい曲。まだ録音されていないと聞いて取り上げました。

藤倉大さんの《SAKANA》(テナークソフォン)は、僕がフランスから帰国した2008年に東京オペラシティの「B↓C」に出た際に委嘱したものです。藤倉さんは学生の頃からサクソフォンの曲をかなり書いていて、カルテットや無伴奏曲も何曲かあります。《SAKANA》には微分音が出て来ますが、氏が微分音をたくさん使ったのはこの曲が初めてだ



大石さんの1枚目のアルバム

『NO MAN'S LAND』

～ヤコブTVサクソフォン作品集～

演奏：大石将紀 (sop、alt、ten、bar)
 曲目：ヤコブTVのサウンドトラックとサクソフォンのための作品7曲と、ヤコブTVの作品をリミックスした dj sniff の作品1曲。
 © ZIPANGU PRODUCTS
 ZIP-0053・¥2300 (税別)

とか。とても難しい曲です。この曲はその後、パリ音楽院の入学試験曲や国際コンクール課題曲になるなど、じつは海外では結構演奏されるようになりました。

高橋悠治さんの《残り火》(バリトンスクソフォン)は、栃尾克樹さんのために書かれ、楽譜がウェブ上で公開されています。とても好きな曲でコンサートでも演奏しました。ただし、楽譜の情報量が非常に少なく、楽譜を見ただけでは分からない部分があります。高橋さんに特有の演奏法があることを僕に教えてくれたのは、高橋さんと親交のある指揮者で作曲

パリ音楽院では
 作曲科の学生の作品を
 学校の行事として
 演奏する機会が日本など
 より桁違いに多い。

家の杉山洋一さん。例えば、フレーズに表情を付けずに音そのものに表情をつけて演奏するとか、そういうことですね。一度そうした演奏法を知れば、高橋さんの作品には共通したものがありますから、たぶん大丈夫だろうと思って今回の録音に臨みました。

杉山洋一さんの《禁じられた煙 (湾岸通りバラード)》(バリトンスクソフォン)は、2016年の僕のリサイタルのために委嘱した曲。米国の人種差別を取り上げた社会的メッセージ性の高い作品です。テーマが3つあり、それが混在して最後にはアメリカ国歌で終わるのですが、その間に様々なプロセスがある。とても自由に書かれていて、小節線もありません。ライブで初演したときは20分弱かかりました。録音してみたら30分弱にもなつて、僕も杉山さんもビックリ(笑)。それでも長い感じは受けません。

野平一郎さんの《一人ぼっち》(アルトサクソフォン)は、わずか2分半ほどの短い曲で、野平さんの他の作品とは雰囲気を変えています。野平さんは、僕が師事したクロード・ドゥラングル先生のために何曲か書いていて、サクソフォンを含む作品は6曲にのぼります。来月(2月)も野平さんのエレクトロニクスを使った30分ほどの曲を東京藝大で演奏する予定です。

藤倉さんとは
 スカイプでやりとり

大石将紀 Masanori Oishi

10年で膨らんだ日本の現代サクソフォン曲の果実

——パリ音楽院時代に学生の新曲をいろいろ初演されたというのは、どういった場か？

大石 作曲科の学生の作品を学校の行事としてコンサートで演奏する機会が、日本などより桁違いに多いですね。オーケストラセッションの授業の中で学生の曲がオーケストラで演奏され、録音もされるとき、卒業試験用に書かれたオーケストラ曲が初演されるとか……。

サクソフォンの場合は、ドウランゲル先生が作曲家とコラボレーションする企画をどんどん作っていました。学生を連れてIRCAM（フランス音響音楽研究所）に出かけ、その研修生とコラボレーションしたりもしました。

——クラスの学生たちも現代作品に対する関心は高い？

大石 現代曲を勉強する機会が日本より断然多いことは事実です。もちろん中には積極的に興味を示さない学生もいて、ドウランゲル先生は嘆いていました。しかし、総じてヨーロッパでは現代作品を取り上げる機会が多く、日本はちょっと少なすぎる気がします。

——現代作品では、譜読みにかかる時間が圧倒的に多くなりますね。

大石 時間はかかります。でも、よく言われることですが、時間をかけて楽譜を読んだ段階で演奏の準備はほぼ終わっている。クラシック音楽では、楽譜をただ吹いてもそのスタイルにはなりにくい。それと対照的かも知れません。

——楽譜を読めば、作品のコンセプトはそのまま分かるものですか。

大石 大体において分かるとは思います。先ほども言った高橋悠治さんの作品のような例もありますが、細川さんや西村さんの作品などは、お二人の別の作品を聴

けばその世界が見えて来ますし、

酒井君や藤倉

さんの作品は

とても技巧的で

すけど、逆に言

うと、すべてが端的に楽譜に表現されていると言えますね。

——藤倉さんは、各楽器の奏法にマニアックなほどにこだわる印象を受けます。

大石 世界各地から委嘱が来ると、藤倉さんはよくスカイプで演奏家とやりとりするんですね。「これはどうやるの？」とか「こんなこと出来る？」とか。相手の部屋の片隅にチャットとミュートが見えたりすると「あ、それ付けて吹いてみて」とか（笑）。その演奏家に対して作品を書くことにとても興味がある、と本人はおっしゃっています。

お付き合いしてみても、藤倉さんの作曲の仕方はすごく無駄がないことが分かります。以前は、メールで1〜2小節のサンプルが届き、それを録音して送るんですが、そのためのアプリケーションを教

えてもらい、パソコンにダウンロードして送ったりしました。そうした適確なやりとりを重ねてパバツと曲を書く。そのあたりにもとても才能がある方なんだと感じます。

今のフランスはドウランゲル先生のスタイルになっっている

——日本の作曲家の作品だけをまとめて録音してみても、そこに何か「日本」

というものを感じますか。

大石 感じません。と言うか、細川さんや西村さんは日本やアジアをコンセプトの一つにして意識的に作曲している感じがします。他の方にそうしたものは感じません。高橋さんは独自の世界を行っています。世代も違えば、住んでいる場所や、影響を受けた場所も皆さん違いますから。

面白いと思うのは、現代の作曲家た